

研究資料

長谷寺縁起上

宮 次 男

長谷寺の本尊十一面観音に対する貴賤の信仰は古来篤く、多くの靈驗説話が伝えられているが、その草創の縁起を描いた「長谷寺縁起」も中世以降、広く流布し、遺品としては鎌倉末期ないし室町時代の製作になるものが数種伝存している。過眼の作品をあげると、

- 1 旧林家 現 幸節静彦氏蔵三卷
 - 2 奈良 長谷寺蔵三卷本（甲本—奈良国立博物館寄託中、乙本、丙本、丁本）
 - 3 同 六卷本
 - 4 鎌倉 長谷寺蔵本二卷（巻三欠）
 - 5 東京 徳川黎明会蔵本（残欠一卷）
 - 6 米国 シヤトル美術館蔵三卷
 - 7 米国 ジョン・パワーズ氏蔵三卷（散逸部がかなりある）
 - 8 群馬 白岩長谷寺蔵本一卷（巻下）
- がある。しかし、長谷寺縁起絵巻についての研究文献は意外に少く、またその全貌を紹介した論著もないので、ここに研究資料として提示するものである。なお、底本としては、幸節本を用い、長谷寺蔵三卷本（甲本）を参照校合した。
- この縁起絵巻は、異本、別本の類は、特定の「長谷寺」の縁起、例えば「泉州堺長谷寺縁起」二巻の如きものを除いてはなく、いずれも同一原本から転写流布したものと考えてよい。その構成は、上・中・下の三巻本で、計三十三段よりなっており、石山寺縁起、清水寺縁起の例でも知られる通り、観音の三十

三応身に因む段数である。

元来、この種の縁起絵巻は、本尊造像に関する草創説話と本尊の利生説話からなる場合が多い。しかし、長谷寺縁起の場合は利生説話がなく、そのかわり長谷寺の山内が聖域として尊崇すべき聖地であることを強調しているところに特色があり、さらに、天皇家と藤原氏との連帯が強固で両家が国の基になることをのべており、藤原氏の作為が強く感じられるのである。この特色は、寛平八年（八九六）二月十日の菅原道真勘出「長谷寺縁起文」に見られるところで、絵詞自体が「縁起文」に依って製作されたことは、両者を比較すると明らかである。更に、ニューヨーク ジョン・パワーズ氏蔵本は上巻内題に「長谷寺縁起文」上とあり（但し中巻は「長谷寺縁起絵」中、下巻は逸す）、それにつづく巻頭詞書は「縁起文」の序に相当する個所が漢文のまま引用されている（挿図1）ことから傍証されよう。

長谷寺の縁起を記載した文献としては、絵巻のほかに、かなりの数があるが古代・中世の主なものをあげると、左のようになる。

- 1 「法華説相図銅板銘」
- 2 『七大寺年表』養老五年所引
- 3 菅原道真 寛平八年勘出『長谷寺縁起文』
- 4 源為憲 永観二年述『三宝絵』「五月 長谷寺菩薩戒」所引
- 5 『扶桑略記』第六 神亀四年三月三十日条所収「縁起文」「為憲記」
- 6 『東大寺要録』第六「末寺章」第九所引
- 7 『今昔物語』巻十一「徳道聖人始建長谷寺語第三十一」
- 8 十巻本『伊呂波字類抄』所引
- 9 『建久御巡礼記』所引
- 10 『古事談』第五「神社仏寺」（長谷寺観音事）所収「縁起」「為憲記」
- 11 『長谷寺靈驗記』序
- 12 護国寺本『諸寺縁起集』所収「長谷寺縁起」所引「菩薩前障子文」「神亀

挿図1 長谷寺縁起絵巻 上巻々頭詞書 米国 ジョン・パワーズ氏蔵

- 六年太政官符」「天平五年徳道上表文」
- 13 菅家本『諸寺建立次第』所引
- 14 『阿婆縛抄』所収「諸寺略記」所引
- 15 『帝王編年記』卷十一 神亀四年三月廿日条所引
- 16 『元亨釈書』第二十八所引
- 17 『三國伝記』卷第二「第十五大和国長谷寺事」
- 18 菅家本『諸寺縁起集』所引

本絵巻の典拠となった菅原道真勸出『長谷寺縁起文』については、早くから疑問視され、後世道真に偽托したものであるとする伴信友「長谷寺縁起剽偽」の考証は尊重すべきである。それで、これが何時、誰人によって作られたかという点については検討を要する。

永観二年(九八四)源為憲『三宝絵』には古記録として「徳道々明等が天平五年にしるせる観音の縁起并雜記等」をあげていて、『縁起文』については何ら記すところなく、また霊木流伝説話も、後述のようになり相違するから、両者の直接的な関係は認めがたいと考えられる。

菅公勸出の『縁起文』を明記する文献としては、『長谷寺靈験記』序があげられる。『靈験記』は「吉備大臣於大唐讀野馬台歸朝事」以下「祈滅罪生善」僧転重軽受得菩提事」まで巻上十九、巻下三十三の靈験説話を編年的に収録し、正治二年(一一〇〇)三月十八日後鳥羽院行幸の内容が最も新しいが、建保七年(一一二八)の第六度の炎上については記述をみないので、その間の成立であると永井義憲氏は推定されている。(同「勸進聖と説話集―長谷寺観音験記の成立」『日本仏教文学研究』第一所収)また、『靈験記』を建保炎上後、その復興の勸進に資するための撰述とみれば、総供養が行なわれた嘉禄二年(一一二六)までの間、それも建保七年に近い頃に成立したのではないかと考えることも可能であろう。

『靈験記』序には

山ハ功德成就ノ山。所ハ諸神守護ノ所也。澄ル古ヨリ、濁ル末ノ世ニ至ルマテ、靈威新ニイマス。大聖ノ住所ナル事ヲ、寛平八年二月十日、菅丞相勸出セシメ給ル縁起ノ心ヲ得テ、多クハ中人ノ障ナル故ニ、愚ナル者ノ為ニ、仮名ニ和ケテ、一筆註シ侍ル也。

とあり、また『縁起文』を布衍して「天照大神、手力雄神ニ勅シテ、此山ヲ開キ、手力雄神本願上人ニ託シテ此寺ヲ立ツ」とまで述べている。したがって、『縁起文』はおそらく『靈験記』の成立した時、十三世紀前半には存在して

いたことは推察されるが、さらに、本尊十一面観音像を造った仏師について、『扶桑略記』の「縁起文」引用縁起は稽主勲、稽文会の二人の名をあげているが、この仏師は菅公『縁起文』では地藏、不空羅索両菩薩の化身として登場するものである。そのほか『三宝絵』系説話にない道明、徳道の出自や、開眼供養の導師など『縁起文』に共通する記載が『扶桑略記』にはみいだせるので、『扶桑略記』が成立した嘉保元年（一〇九四）頃には、この『縁起文』の素地がある程度できあがっていたと解することができるであろう。さらに、建久二年（一一九二）の『建久御巡礼記』には、『縁起文』にきわめて近い内容が収載されていて、おそくとも、十三世紀の初期には本絵巻の先行形態としての『縁起文』は成立していたと考えるものである。

なお、護国寺本『諸寺縁起集』所収の三史料は『縁起文』と共通する内容が多いが、これについては問題点も指摘されているので（違日出典『室生寺及び長谷寺の研究』）、ここでは敢て深入りすることはさけた。

次に長谷寺縁起絵巻三巻の内容についてのべるが、各巻の段は通し番号で示すことにする。また詞書の詳細は別掲の公刊を参照されたい。

巻上

1 「寛平八年二月十日依 勅菅丞相の勅出せしめ給ふ長谷寺の縁起にいはいはく……」と書出し、道真が長谷寺に入り、古記録を調査するうちに靈夢をみた。それは、金峯山より橋がかかって三体の蔵王権現が現われ、この山が諸々の神仏の靈場であり、神仏の加護の厚いことを告げるといふ夢であった。そこで道真はいよいよ信仰をあつくして行基国符記七巻、流記三巻、本願聖人上表状一通に依って縁起文を勅出した、とその由来をかかっている。これは『縁起文』の序に相当する内容である。

絵は、巻物をひろげてほほづえをつき、まどろむ態の道真、三体の蔵王権現の出現、「縁起文」を執筆する道真の三場面よりなる。

2 泊瀬寺（本長谷寺）の縁起を述べる。泊瀬神河の上流滝蔵にある天人所造の毗沙門天像の宝塔が流出して山麓の瀬に泊った。武内宿禰がこれは吉祥であることと占い、北峯の西北の隅に納め、泊瀬豊山と号した。その後三百年を経て道明がこれを石室に移し、以後この山は繁昌した。里の名を寺号と定め、また天武天皇は道明に勅して西嶺に石室、仏像、三重塔を建立した。

絵は、一對の狛犬のある滝蔵の社とその脇に建つ堂に毘沙門天らしい天部の下半身がのぞまれ、その傍を流れる河の下流で宝塔をとりあげる冠束帯の公家があり、山を隔て法華説相図銅板が大きく示され、その前に宝塔を捧持する僧形と、銅板の脇に安置された宝塔があり、一字の堂と三重塔がつづいて図は終っている。この僧形は道明であろう。

本長谷寺、後長谷寺については、護国寺本『諸寺縁起集』所引「菩薩前障子文」にみるほかは、菅家本『諸寺縁起集』に本長谷寺を挙げていていどで、他にみない。なお『伊呂波字類抄』は「障子文」による記述である。

3 長谷寺（後長谷寺）が徳道によって建立されたことに関連して、徳道の生いたちをのべる。すなわち徳道は播磨国揖保郡の人、俗姓は辛矢田部造米丸といひ、法起菩薩の応化、第三仙人の再誕で、母を菽子という。母は明星が口に入った夢をみて懐妊、十六カ月を経て、齋明天皇二年丙辰九月十八日の日出に母をなやますことなく生まれた。

絵は、母の胎内に明星が入る所と、出産の場面を示す。

4 徳道伝の続で、十一歳で父に、十九歳で母にわかれた米丸は、両親の菩提を回向するために仏道に入り長谷の山に入って師にあり、出家受戒した。時に天武天皇四年二月五日、二十歳の時である。

絵は、梅の咲く山かげにある堂で剃髪する徳道をあらわす。

『東大寺要録』によると、道明は唐僧、徳道は良弁の弟子としているが、その根拠は不明。徳道が父母に死別した年令は「徳道上表文」、「建久御巡礼記」、「諸寺建立次第」それぞれ明記するが、出家の年令は明らかにしていない。

5 徳道の仏道修行をのべる。

絵は、堂内で読経する徳道を描く。

6 徳道は長谷の地相を検知して天下無双の勝地なることを知り、此の山に精舎を建立する願を發し、山内を見まわすと北峯に金色の光が現われた。日々にその所に行つて勤行精進するに、恒に此事をみた。

絵は、徳道が山頂から發する光を合掌するところ、徳道の脇には机上に經卷があり、堂の縁に水瓶がおかれて、勤行精進の情況が示されている。

7 徳道は無上菩提の心おさえがたく、師の道明に仏像を造るために御衣木を求めようと思うと語つた。道明は善き哉、近くの神河の岸に靈木があり、もつとも吉である。それについて昨夜一つの夢をみた。数人の異形の者が彼の木の中に坐つて坐つてならび、その中の一人の童子が天蓋を木の上にかかかけていて、また木の下には白衣の翁がいる。自分が翁に誰人かとたずねると、翁は、「我は三尾大明神である。この木を護るために本国から片時もはなれず、諸々の眷属をつれて来たのである。又天蓋をもつ童子は当山守護の童子で、この靈木は彼の請いによつてこの山に来たものである。」と答えた。そして夜をあかすと汝が請問したと語つた。

絵は、道明の住坊をたずねて語る徳道。

8 徳道は長谷の郷の古老に木の由来をたずねると、古老は、此の木がここに来て以来、里の人々は、たたりをなすという木なので不安に思い、力をあわせて遠くの地に送ろうと思つていと語つた。これ以後が靈木説話に導入される。

絵は、山中で古老に木の由来をたずねる徳道。

「徳道上表文」、「諸寺略記」は古老の伝えとして導入する形式をとる。

9 古老の言。近江国三尾前山の白蓮花谷に大きな臥木があり、長さ十余丈の楠で、此木は常に光を放ち、異香がのぼり、又諸天人が飛来して白蓮花をこの木に散らすと、この木から白蓮華が生じて、多年がすぎた。それゆえに、ここを白蓮華谷というのである。

絵は、臥木の上から天人が散花し、木から白蓮華が生じているところ。
白蓮華谷についてのべるのは菅家本『諸寺縁起集』のみである。

10 又云、継体天皇十一年、雷電風雨がおり洪水となつて此木が彼の谷から流出した。

絵は、風神・雷神が大風、洪水をおこし、異行の者や持蓋童子、白衣の翁が靈木を護る光景。

11 又云、志賀郡大津の里にこの木は七十年とどまつた。里の人が靈木であることを知らず、木を切りとると、里の家々は火災を生じ疫病が流行して不吉なことがおこつた。そのわけを占うと、この木のたたりであるといふので、以後は木を切る者はいなくなつた。

絵は、岸边にある木をなたで切る里人とそれをみまもる翁、童子、異形の者たち。それにつづいて家々の火災、病気の者たちを描く。

この木の流出とそのたりの説話は、『三宝絵』では、洪水のあつたのは「昔辛酉歳」で、『縁起文』の継体天皇即位十一年丁酉歳および「徳道上表文」の「去丁酉年」というのと于支があわない。なお『建久御巡礼記』、『諸寺略記』は「丁酉」の年をとり、大津の里で木のたたりがあつたとのべる。『三宝絵』は高島郡のみをか崎という所で災害があつたとする。『七大寺年表』、『今昔物語』は高島郡というだけであるが、いづれにしても于支と場所が齟齬していることは明らかである。

12 又云、大和国高市郡八木の里に住む小井門子という女性が、父母と夫のために仏像を造らうとして、用明天皇元年に八木の辻に靈木を曳き置いたが、そのたたりによつて彼女は死亡した。その後三十余年靈木はそこに在つたが郡郷の家々に不吉なことがたえなかつた。そこで葛下郡の人、出雲臣大水沙弥法勢という僧が十一面観音像を作らうとして、推古天皇七年に葛下郡当麻郷にこの木を曳き置いたが、願をはたさず法勢も死亡した。その後この里に五十余年おかれたが、あちこちで不吉なことがつづいた。

絵は、近江より大和へ霊木が曳かれて行く所と、門子が死去するところの二場面である。

『三宝絵』では、門子の説話はなく、いつもの大みづという人が、近江からこの木を当麻の里にかかるが、と曳いて来たことになっている。しかし、願をはたさず死去して、八十年間、木はそこにあつて不吉なことがつづいたとあるから、絵詞の年数の合計とほぼ合致するわけである。『扶桑略記』、『古事談』とも『三宝絵』引用記事は当然ながら、門子説話をのせていない。また『今昔物語』は出雲大満の名を出さず「大和国葛下ノ郡ニ住ム人」とする。「障子文」、「上表文」、「建久御巡礼記」、「諸寺建立次第」は門子説話をのせる。しかし、「障子文」は大満説話を欠き、「上表文」『巡礼記』『建立次第』は大満の十一面造像発願のべるが、当麻に曳いたことは記していない。

13 「又云、天智天皇即位七年、城上郡長谷の郷の神河の浦をさしてひきすてふさりぬ」と書きだして、その後、木はこの里に三十九年間放置された。この木を犯す者はおだやかでなかったという。徳道はこのことを聞いて、霊木であることを知り、里人に請うてこの木をもらいうけた。

絵は、持蓋童子、白衣の翁にみまもられる木を指して徳道にその木の由来を話す古老を描く。

『三宝絵』は、出雲大水説話のあとに、不吉が続くので、郡司、里長らが太みつかねみや丸という者に命じて、郡里の人たちとともに木を戊辰歳に長谷河の中に引すて、三十年を経たとあり、『古事談』は村人が心を合わせて長谷川の上に曳きすて、三十年を経たとし、『今昔物語』は其子宮丸と郡人たちが長谷川の辺に曳きすて二十年を経たとし、いずれも当麻から長谷への移動の経緯をのべている。なお、「菩薩前障子文」、「徳道上表文」とも宮丸説話はみえない。「縁起文」は「民類同心以三人王三十九代天智天皇即位七年戊辰歳」。指ニ城上郡長谷郷此神河浦「挽捨去。」とあつて、人民が心を合わせてこの作業をしたことを明らかにしている。これに対し、絵詞がやや不明瞭な記述になつてい

ることは否定できない。宮丸説話は『三宝絵』系の特色とみてよいが、絵詞の不明瞭さは、『縁起文』が「天智天皇……」で改行になっていた為、その個所から訳文した結果によると考えてよいであろう。なお『七大寺年表』は近江国高島郡から山城国宇治河に漂流し、道明がこれを長谷に曳いたとし、『扶桑略記』は神河浦に至った木を沙門道明、沙弥徳道が控え引いたとする説と、「為憲記」(三宝絵)を併せのせている。しかし宮丸の名はあげていない。